



「解せないな」

はんかふざ

半跏趺坐で背中を緩やかにして坐る雪絵が、両の目を閉じたままで呟いた。

「……何がだ、雪絵。昼餉の鱈が塩焼きだったのが、そんなに納得いかんかったのか？ 煮つけか照り焼きの方が良かったのか？」

食い意地が張っとるなあ、と白峰は雪絵から三人分を空けた隣で、同じく瞳を閉じて座禅を組んで応じた。

「……違うよ。確かに左馬ノ介が調理当番に入っている日の割に、簡単そうな料理が出てくるのは珍しいよ。けど、そうじゃなくて……」

「あれは例の公官殿が、西方から良い塩を送ってくれたのを、左馬ノ介が試してみたいと言ったからだそうだな。実際、稽古後に塩の利いたメシはうまかったろう」

「うん……」

舌に残る魚にまぶされた塩と脂汁の旨味。食後しばらくも残るその味を、雪絵は思い出さずにはいられない。

じゅるり。

「いや……、そうじゃなくってね、白峰さん……」

「？」

「春花さんのこと……なんだけれど」

何か恥ずかしいモノを告白するような雪絵の様子に、白峰は若干口元を歪ませ、無言で先を促す。雪絵はそれを受けて、考えをまとめるように一旦呼吸をして、そして言う。

「先刻の稽古で春花さんと手合せした後に、春花さんが皆に言っていた。獅士堂の太刀について」

昼下がりの組内の侠達は、それぞれの日毎の受け持ちがある程度定まっており、あるいは町に出てシマを周り、人足の力仕事を補助したり、商家の問題事を聞いて回り、その問題の解決の方策を講じたりと、邸宅から出張っている者が多い。無論、屋敷に留まり諸般の家事雑務や、大所帯でなにかと物入りなので、物資の仕入れに出入りする組員もいて、屋敷内が静まりかえるということ

はない。

武侠といえど、日がな一日に渡り武道の鍛錬修練をしている、という訳にも
いかないのだ。堅気の働き手と違って、侠客の類は暇なときは暇とはいえ、獅
士堂ほど大きな組としては、行う事は多々あるのだ。

ちなみに春花は、今はお昼の読書中。

そんな中、雪絵と白峰が個別講座としての座禅を行うこの一室は、母屋や道
場から離れ、静けさに包まれている。

「静けさ」——と、雪絵は口にする。

「獅士堂の太刀とは、静かなる太刀。それはここに来て、多くの侠達と刀交え
る中で何度として耳にしたよ。……春花さんも、白峰さんもそうだと教えてく
れたことだ」

「そうだな」

「その『静かなること』とは『心』を静かにする事だとも聞いた。で
は、刀を振るって相対する者を斬って、心を静かにする、とはどういうモノな
んだろう」

「それは儂がお前に言ったことは何度かあると思うが、お前は どう思う、雪絵」

目を開かずに静かなままで、雪絵は応じる。物の少ない畳敷きの部屋は、シ
ンプルで整っている。

「太刀合う者への怒りや憎しみを刀に載せない。そして怒りや憎しみで人を斬
らない。そういう心と精神で刀を振るう。……そう白峰さんは教えてくれた」

雪絵は思い返す。

「でも私はそもそも今迄、誰かに怒りをぶつける気持ちで刀を振るったことが
ない。……そんな『心』も無かったから……よくわからない」

「ふむ。そのようだな。果敢無い望みかもしれんが、そういう事は無ければそ
れはそれで良い事だ」

そうは思ってみても、雪絵は自分が無感情な人間——『人形』であったこ
とに後ろめたさを持っている節がある。そういう処で雪絵は、年頃の女の子以
上にデリケートな扱いを求められる。白峰はこうした時間を持って雪絵と係わ
り、それを了解している。

「お前はまだ若い。故に、これからの為に心得を持つことが肝要だ。分かるな」

第一章 太刀の式

「うん」

このように、雪絵は素直なところを見せる少女なので、白峰も年長者としてモノを教え易い。

「獅士堂の太刀、その精神に則した『静けさ』とは、心の在り方にとどまらない。迅速な業で相対する者を苦しめずに殺すこと、相手を斬って勝利を誇らず昂ぶらず、死した相手を悼み尊ぶことも大切だ。それらは『心』なくして成り立たない」

この『心』とはなんだ、と白峰。

「相手を想うこと」

僅かばかりの黙考も躊躇もなく答える雪絵。

「うむ。獅士堂の太刀は、太刀合う相手への『尊意』のうえに成り立つ。奥義といわれる技は存在しない。ただその極意を心することだ」

そこで白峰は片目を開けて、隣に座る雪絵の様子を窺う。

「で、何が気になるというんだ」

気難しそうに眉間に皺を寄せて、瞼を閉じている雪絵。若干普段の可憐さが影をひそめている事には取り合わず、白峰はそう訊いた。

「先刻、春花さんと私、一本勝負したじゃない」

「うむ。内容は拮抗しているとも見れたが、どうにもあしらわれていたな」

「それはいいんだけど、その後で！　その後で春花さんが言っていたじゃない。「刀は技だけれど、術理を修めた先にこそ、刀で生きることの本当の意味がある」って。それがつまりは、刀に相手を想う事を載せるということ……だよね？」

「間違っではおらん」

う～ん、と雪絵は唸って、体を左右に揺らす。静座が出来ない娘である。

「『心』は相手への気持ちや感情で、それは大切なモノだと分かる……。けれど太刀合う時には心を静かにして臨まなければならない。これって何かおかしくない？　どっちかが正しくないのかな」

「矛盾しておると思うか？」

「ムジュンってなに？」

「あちらを立てればこちらが立たん、ということだな、今の場合。左馬ノ介な

第一章 太刀の式

ら詳しく教えてくれるだろう」

「ふうん。うん、今度訊いてみる」

ふむ、と白峰は自分の顎を撫でそうになって、今が座禅の最中であることと、隣の少女に対しての態度に気付く。

「つまり、お前には自分の内でその二つが成り立たないという事か。それでは心が静かで在れないと」

「.....うん、そういう事かな」

感情を制することを刀を振るううえで課すと同時に、人間を斬り殺すことに憎しみを挟まず、慈しみや哀悼といった情感——もっといってしまえばと、武俠としての精神的在り方を伴わせる事。それが獅士堂の太刀のこころ。

確かにこれは矛盾があるように映る向きもある。

まさしく雪絵の言う 『解せない』 だ。

雪絵が割と面倒な時間でもある座禅をして、白峰に答えを求めたくなるのも人情といえた。

「.....感情を抑えることは強さだ。しかしその反面で、感情を殺すことは必ずしも強さとはならん。それらはあまりに動的だ」

「よくわからない」

「まあ、聞け。動的とは、人の.....また武俠の心にとっても移ろい易いモノだという事だ。すなわち、心を静かにする事の価値は、時によって移ろうという事でもある」

「.....それは、あれかな。同時に 『想い』 の価値を否定していない... ..んだよね？」

揺らしている体を止めることなく、雪絵は尚も考え考える。

「あれ？ という事は、心を静かにする必要はないの？ でも必要がない事を教えるわけがないだろうし、実際に春花さんは太刀合いの時にとっても静かだし」

かつての初見の一合。そして組に来てからの、傍らで接して、刀を交えた春花の印象。そこに齟齬はない。

「あれ？ あれ.....？むうう」

どうにもグルグルと堂廻りを始めた雪絵に、白峰は助け舟を出してやることにする。

第一章 太刀の式

「刀技でいう太刀合いと同じよ、雪絵。一辺を視るのではなく、全体を視て、斬尖を視て、相手の四肢も瞳も視る。心の無辺なるを悟れば世界は汝のモノなり、だ。心を自在にするのだ」

「.....分かるようで分からない.....」

「まあ、今はそれもよかろう」

腕を胸の前で組んで、納得の行かなそうな雪絵ではあるが、そんな彼女をして白峰は言う。

「人と人の闘いならば、己の信じる道を征けばよい。戦い方を貫け。人はそうして視てきた風景しか本当には知り得んし、語れんものだ。焦らんでよい」

「焦らなくてもいい、.....ね」

「うむ、そうだ。焦って出した答えは、あまり身のためにならん」

「.....でもな。白峰さん。私はずっと.....」

「うむ？」

そこで言葉を切る雪絵に、白峰はしかし追及はしない。焦るなどというのは、自分の内にある何かにも通じる事だからだ。それは、雪絵が自ら育て、カタチを作って、躰わせばいい。白峰はそんな風に若い者をみる。人を育てるとは、それこそ気が長くないといけない、というのが白峰の経験論だ。

こうして週に一度や二度は、座禅瞑想という時間を設けたのは、何も雪絵の悩み相談の為ではない。むしろ、雪絵の情緒が未熟で、コミュニケーションも拙い事が、これから組で多くの人間と共同生活をしていくうえでも、また彼女が一人の人間として生きていくうえでも、問題となり支障となると春花が憂いたことが始まりだ。そういう時間でも、雪絵自身が少しは胸襟を開いて話すようになったとはいえ、彼女自身が言葉に出来ないことを無理に強いることは、誰も考えない。彼女に対する認識は、デリケートなのモノだからだ。出自も、心も、今の状況も。

白峰としては、若干娘を持った父のような気がして悪い気はしていないのだが、それで雪絵に『何でも相談していいぞ』、『何でも話してみろ』などという事はない。まあ、最初に比べたら進んでモノを言うようになったし、間合いの敏感さも薄らいできただけでも成長だろうと思う。

だが、雪絵が言い淀むことが時々で違うにしても、今は何を表に出せないの

第一章 太刀の式

かを白峰も察することは出来る。サトリの化物じみた読心を誇る左馬ノ介でなくとも。

それは、隣に座る少女の貌を盗み見ることで然と知れる。

雪絵が顔を幾分紅潮させて、声を躍らせて話す時の内容は、大抵決まっている。

今だってそうだ。

それだけでも、彼女が視ているモノが判る。彼女が何に心を躍らせ、胸を高鳴らせているかが判る。この黒髪少女が視て――魅せられているモノ。

(これも頭の器というのか。それとも人望の成せる技か.....はたまた、刀の修羅には修羅が共に遊ぶか)

そう思う白峰は、雪絵のついこの間までを思い返す。彼は争乱のあった宿屋で、組織の一員の手記を目にして、雪絵の過去の扱いと変化の過程の状態を知り得ている。

揺籃にして、その身に虚ろという闇を抱えてしまった存在が、瞳に映したモノ。

衝撃。鮮烈にして彩どりあるモノ。

雪絵自身はそれを 『美しいモノ』 『華』 と形容する。そしてそれを視たことで、虚ろだった少女は光を求めて自らの殻を破った。それが組織への叛乱だった。

あの日の惨状後に到着した春花や白峰、そしてその後の雪絵を間近で見してきた白峰をして思う。『人形』 であった彼女は、『人』 としての何がしかを得たのだと。そして、それを与えた存在が、彼女の憧れになったことも知っている。

それが彼女の^{いま}現在からありありと見て取れる。

(美への目覚めと憧れか。.....それがこの娘の始まりとなった。人斬りの姐さんに憧れるとは、どうにも困ったものだな)

しかし、と白峰は口元を歪ませる。その笑みは、若人への希望が込められていることを自覚しながら。

(自らの過去や心の闇に、恐れず立ち向かう強さになるのであれば、それは何でも構わんのかもしれん)

第一章 太刀の式

座禅を行う隣の少女は、先程からおちつきがない。こうして瞑想をしても、問答がそれに及ぶといつもこんなものだ。それは彼女が自然と思いが辿り着く、彼女の『母親』となった者がそうさせるのだろう。

春花という存在——そして彼女から受けた『心』が、雪絵にそうさせるのだろう。

だから、この時も雪絵は思っていたのだろう。出逢った瞬間の胸の高鳴りを——身の震え——湧き上がる昂揚感——そして堪らなく『心』というべきモノが震えた、捉えた『美しさ』を、心に描いていたことだろう。

(刀を振るうあなたは、どこまでも美しい……その殺陣舞は、私の心を捉え、惹き付けてやまない)

迷いなく振り下ろし、刹那の躊躇もない。けれど残酷なまでに人を斬り殺す刀技は、どこか煌めいて視えて。

その魅せられた、今彼女の内に確かに在る『心』で雪絵は言う。

「白峰さん。私は春花さんのように、人を想って刀を振るい、そして斬った後もその人を尊ぶという事を、思うようには出来はしない。それに春花さんが普段何を考えているかも、あの人の想ってモノもまだ分からない」

「うむ。お前はどうか。今のお前は、人を想い刀を振るっているか？」

「たぶん、違う。私の刀は、一人で命の遣り取りをする道なのは変わっていない気がする。今の私は誰かの為だとか、人の何かを想ってとか、そういう気持ちじゃない。私の想いは、私の成したい事だと思うから」

隣で吐息の漏れる音を白峰は聴く。そして雪絵は続けた。

「それは春花さんとは違うんだよね」

「違ってはおらんさ。まったく同一ではないがな。あれは自分の想いが、誰かを想うことに繋がっているだけだ」

ふふつと、今度は先程よりも軽やかな息遣いがした。

「春花さんの刀技って、殺陣舞って、だからあんなにも色鮮やかなのかな。それが獅土堂の頭梁ってことなのかな。よくわからないけれど」

白峰さんはよくわかっているね、と雪絵は続けた。

咳払いを一つして返すよい歳の男に、雪絵は小首を傾げる。

「……君の心が我に近ければ、いずれこの寒山に心至るだろう」

「？ なにそれ、白峰さん」

「さて、漢詩だったが、何だったかな」

更に反対側に頭を振って、正位置に戻して、雪絵は声を正して言う。繰り返すように、自分の『心』を。今はまだ、秘めて出せない想いを。これだけは臆面もなく言えるというように、躊躇いなく口から出した。

「私は春花さんのような美しさを求めている。そしてそれは、どこまでも刀で生きていくという事なんだよね。私はそれを心に決めている」

4

「今日はお客さんが来るのよ、雪絵」

「.....は？」

突然そう言ったのは、嬉しそうな顔をした春花だった。

その表情を見て、雪絵はまたぞろお客というのが誰であるのか当たりをつけた。

「.....お客って、またあの西方の男なの？」

どうにも訝し気というよりも、もはや面倒事厄介事を突き付けられた子供の貌をしている雪絵。春花はその頬に両手を添えて微笑む。

「もう。何をそんな不景気な顔をしているの、この子は！ 今日とは違うわよ。まあ、西方というのは、合っているとさえ合っているとさえ言えるけれど」

「.....？」

春花の言葉を聞いて、雪絵は自分がそんなに気分が悪そうな表情をしていたか、と目を瞬かせた。そして、

「違うって.....じゃあ、誰が来るの。私の知っている人じゃないの？」

「まあ、知らない子ね。というよりも、今日はあなたとその子を逢わせようと思って呼んだのよ。その子も侠客の家の子でね.....って」

娘が顔を手でサンドされたまま、見る見るその表情を曇らせていくのに驚いて、春花はぱっと両の手を離した。

「もう、何その顔は。そんなに嫌そうにしないでいいじゃないの〜っ」

そしてまた両手で雪絵の頬を触り、わしゃわしゃと揉みしだいた。これで固くなった表情筋を持つ娘の顔が解きほぐれてくれればめっけモノである、と言

第一章 太刀の式

わんばかりに。

「も……っ もおおおうっ わかったよ。会います。会うからもう、止めてよ。顔をこね回さないで……っ」

牛が呻くような、といったら雪絵に失礼そうだが、そんな絞り出した訴えを受けて、春花はまた、ぱっ と両手を放す。そして手のひらを広げて明るく笑う。

その笑顔は、この季節に相応しい春の花のように朗らかで、こちらの心も解きほぐされるような気にさせられる。などと雪絵は感じながら、同時にしつらえられたイベントに気が重くなる思いだった。

「……で、一体誰が来るっていうのよ。いや、それよりも、何で突然私に会わせたい人なんて。私は別に今でも十分人は多いと思うのだけれど。というか多過ぎでしょ、この組……」

「う～ん、まあ、こっちも色々ね」

そういう春花の思惑は、実を言えば先日の白峰との会話に端を発する。

「白峰さんにはいつも助かっているけれど、まさか我が娘のことで通訳のようなマネをさせてしまって……ありがとうございますね」

16時頃。刀を振るい、半刻以上は一人稽古をしながら、そう口にしたのは春花だ。

緋太刀、血刀・雪斬。

緋色の太刀姿の木刀である。

「構わんよ。儂もそれなりにやっているさ」

「まあ、白峰さんも娘はいなかったから、案外楽しくおしゃべりしちゃっているのかしら？」

動き辛そうな着物の裾姿での縦横無尽の太刀振るいを一旦止めて、軽く弾む息で春花は白峰に微笑む。いつも通りの彼女のからかいだ。

「さてな。お前が体面を気にせず、バカ可愛がりをしているところも、一度見てみたい気がするが」

「あはは。時期が来たらそういう時間も良いモノだけれど、今は我慢しておき

第一章 太刀の式

ますよ」

もう、撫で撫でしてハグハグしたいんだけど！ と心の中で情念が燃え上がっているのは、今の自分の胸中にだけしまっておこう、と春花は表情を整える。

「しかし、あの子ども視ていて大概、刀の虫だとは思っていたけれど、白峰さんと胸襟を開いて語らう内容でさえ、そんな内容ばかりですか」

「ふむ。他には、たまにメシの話をすると喰いついてくるな」

血刀を地面にズサッ と突き刺して、柄頭に手を置くと、春花は朗らかに声を出して笑う。

「あいつにとってお前は、出逢った時から憧憬の対象のようだ。だからこそ、そのお前と、お前の刀技に近づこうとあれは憂いている」

「憧れ、ね。それは心煌めくモノね、あの子どもにとって。まあ、シャープでスタイルが良く、クールな精神性を持ち合わせた出来る大人の女性に、憧れるのは仕方ないと言えるかしら」

と、豊かな髪を両腕で掻きあげて、婀娜っぽくしてみる。白峰は一種セックスアピールにとれるそのポーズに、しかし鉄の意思でながして話を続ける。

「大人の女性云々は知らんが、一人の武俠としては、お前ほどの見本はおらんだろうからな」

あれが女としてのお前にまで憧れを抱いておるかまでは預かり知らん、と白峰は顎をさする。

「雪が口にしておったのは、獅士堂の太刀の心よ。『静かなる太刀』 と 『尊意』 に齟齬を感じて、己が身でそれを体現出来ん事に悩んでおったのだしな」

「そう。あの子どもまだまだ子供だと思っていたけれど、獅士堂の武俠としての片鱗に触れているのね。子供が学んでいると安心するわ。嬉しくなる」

難しい顔をする白峰だったが、気を変えたのか口を開く。

「幼いながら、あれも武俠だということやもしれん。これまではともかく、いや、これまでがあるからこそ、武俠らしい武俠になるのかもな、雪は」

頷いて春花は、着物襟元をパタつかせて熱そうにしている。そんな春花にいい加減付き合うのも馬鹿らしくなったか。白峰は背を向けて話す。

「しかし武俠然としたように育てるのならば、それで儂もそのようにモノを考

第一章 太刀の式

えて言うが、しかし良いのか？ 雪は多少言葉が拙い人間に見えるが」

「リテラシー問題ですか。でもあの子の様子を見ていると、不特定多数が集う学び舎に通わせるのは、組で稽古させるよりも危なっかしい感じがするでしょう」

しばし考えて、白峰は頷いて返す。

「あ、そうだ。言語学が少し必要なら、私が読み書きを講義してあげるのもいいわね。それなら合法的にあの子とイチャイチャできるわ。これね！」

「何が合法的なのか……」

そしてイチャイチャとは……、とさすがの白峰も突っ込みたくなる春花のはじけ振りだった。

「それにね、思うに寺崎さんも言っていたけれど、学歴というモノは 『特別な才能を持たない人間の、最後の武器』 みたいなモノなのよ。私達やあの子のような人間には、それ意志と覚悟が伴っていれば、今の在り方で十全だと思わない？」

「むう」

そこは武俠として生きてきた年数が——その年輪が人よりも倍以上はある白峰だ。その刀での人生のうえでの辛苦以上で、生きている事に困った記憶がない。それは学ぼうとすれば、人はいくらでも学べる、という事を白峰も春花も体現して生きてきたからに他ならない。

「だから無理に年相応に学校に通わせる必要は、それほどないと私は思うのよね。あの子が自ら望むなら話は別だけれど」

邸宅の広い庭に吹く春の風を肌を感じながら、春花は心を遠大に思い言う。それは我が子の行く末を案じる、母親そのモノという面持ちで。

「それよりもあの子には、あの子なりの速度で、そして心の赴くままに、学び得るモノの方が大切だと思うの」

(……まあ、こいつなら人に文学を手ほどきするのも、楽しくもあるのかももしれんな)

と白峰は思い、そして加えて言う。

「今さら確認するのも何だがな、それが武俠の道でも、か？ お前は雪に武俠になる道を征かせることに、何の迷いもないということか？」

第一章 太刀の式

その問いに対して、春花は一切の考える間を置かずに、平然とした声音で返した。

「そうね、ないわね。白峰さん、私はね、あの子の産声を聞いた刻に、もう確信したわ。あの子は刀でしか生きられない。……親がそんな風に思っちゃいけないのだろうけれど、でも、そんな気がしたのよ」

「……未来視か」

「さあ。そんな気もするし、違うかもしれない。案外、只の母親としての勘かもしれない。あの子に視た可能性の話なのかもしれない」

太刀合い、斬り合う。屍山血風の渦中の生。

それが我が子の宿業であるかのような。

春花はあの雪の窓辺で、我が子を抱いて、そんな感慨があったのか。白峰はそう再認識する。

「けれど、それは血生臭く、暗く、哀しいだけの道じゃないわ。刀を以って対峙するという事は、すなわち相手と向き合う事ならばね」

「刀は己を語る手段となる、か」

頷く春花。緋色の双眸が細められる。

「『武』を顕わす武侠の道に限らないわ。それはあの子が『人』として生きていくうえで必要なことだわ。その生が闘いと流血に彩られた時にこそ、武侠は己が人である事を知らなければならないからね」

「その生が血染めであるから事が常であるからこそ、大切なモノか。確かにな」

「あの子にも、自らの手の内の刀で望み、求めるモノがあるのでしょうか。それはこれから武侠として生きていくうえで、あの子の指針となる。その為に己を知り、確認し、他を知り、世を知り、受容し、何よりも己が刀を振るう意味を知ることが、これから必要になる」

「……………成長か」

白峰の言葉に、春花は楽しそうに頷いて返す。隠すことをしない、弾むような声だった。

「我が子の成長というのは、大変楽しみなモノなのですね」

この女性との付き合いも長くになる白峰は、その胸の内に同期して口元が綻ぶ。

第一章 太刀の式

「ふん。それで、具体的には何かしてやるのか？ これから」

振り返り、白峰が問うと、ふっふっふ、と春花は何やら『裏がありそう』と人に言われそうな貌をして笑った。

「ほら白峰さん、小手毬が咲いているでしょう」

「……………」

庭のひと隅を指で示す春花。応じて視る白峰の視線の先には、季節の白い花が揺れる。

「思いついたわ。あの子に同年代の子を紹介するというのはどうかしら」

「……同年代、というと」

「ほら、あそこの組の御嬢さんがあの子と似た年頃じゃない」

「あそこ」という春花の言に、白峰はひと息考えて思い至る。

「ああ、あのお嬢か。……ふむ」

腕を組んで尚考えると、白峰は春花を見遣る。

「悪くないかもしれんが、しかしあのお嬢は悪い子ではないかもしれんが、少々鉄火の気性があるぞ。雪とうまく話を出来るか怪しい気もするが」

「それが良いんじゃないの。というか、だからイイと思わない？ 成長というのは人との出逢いですよ、白峰さん！」

もう腹は決まったと言わんばかりに身を躍らせて、来たる邂逅に胸を躍らせている春花だった。またぞろ何か視えているのかは白峰には知れない。

「何とかなるよ。あの子には友達も悪くはない。いつも話し相手が左馬ノ介くんばかりでも難でしょう。早束手配をしましょう。招待状かしら、それとも会談？」

血刀を手に、ウキウキと自らの部屋に向かって行く春花を、白峰は、

「まあ、良いようになれ」

と春の空を見あげてつぶやいた。

「何ですか、白峰さん」

と、左右で切り散らしが異なる短い黒髪を持つ少年——左馬ノ介が、屋敷の廊下を白峰と並んで歩きながら問うた。

声を向けられた当の白峰は、庭先の澄んだ空を見あげている。

第一章 太刀の式

「いや、雲行きがどうかと、言っただけだ」

「雲行きですか。それは気になりますよね」

と左馬ノ介は、自分達の後ろについて歩いてくる人物の方を見ずに返した。

その人物は本日この屋敷に――ひいては獅士堂の組と、その頭梁であるところの春花が招いたお客人として、今現在待ち構えているもとへと案内しているところだ。

丁重に出迎えて欲しい客人ということで、向こうはどういう素性の者かを、左馬ノ介は春花から事前に聞かされていた。その名は彼の知るところであったし、獅士堂一家が縁深い関係にあるという事実も、なるほど理解できる。しかし、その客人を呼び招く目的に対しては、多少の慎重な感慨が左馬ノ介にはあった。

(この組に入り、姉さんも多くの人間と接触した。今の所その関係性の塩梅は一長一短だ。果たして、このお人は姉さんにとって吉とでるか、はたまた……)

静かに歩く背後の人物に対しての密かな懐疑心こそ悟られずに、左馬ノ介は白峰と共にお客人を目的の部屋へと連れて来た。

「姐さん。お連れしました」

部屋の前で左馬ノ介は跪坐で右拳をつき、頭への礼儀をとって応接した。廊下を挟んで庭に面した客間の襖扉は開かれており、奥に二人の人物が座って待っていた。上座に春花、次席に雪絵が居る。二人とも普段は時に、男物着物や袴などの動きやすそうな和装をしている。それが今日は、華やいだ明るい色彩の、留袖の訪問着を着用している。伝統柄であることが、どこか格式と威厳を纏っているように左馬ノ介には見えなくもない。

「では、こちらへ」

と、左馬ノ介が客人を促すと、その声に先だって動く気配があった。

反射的に身構える左馬ノ介と、様子を窺う白峰。そして客間に踏み入るその人物は、スカートの裾をひらりと舞わせて、小走りに春花へと向かう。

その“少女”に雪絵が目を見張る。

そして少女は、立ち上がる春花に向かって、思いっきり抱き着いた。

「は!」

「……………!」

「……………」

少女の突然の行動に、雪絵が目を剥き、左馬ノ介が戦慄し、白峰が渋面を作った。

腕を春花の身に回し、その胸に顔をうずめる少女。そして上気した顔を春花に向けた。

「春花さん、お久しぶりです！ お招きくださって、アタシ、嬉しいです！」

きゃーっ と、その少女——清家仁美は、春花の体温を受けとらんと凶らんばかりに、強く抱擁を続けた。

(……………、なんなの、この子……！)

これが坂本雪絵と清家仁美の出逢いだった。

……続く。